

原発

事故の遺産（その二）

歲月というものは非情である。一時は受け入れを断るほどのボランティアの人数も現在は急減している。人々は悲しみ、苦悩し、現実が見え始めると疲労感が出てくる。

ここでは実際に起こっている現象を紹介したい。これは原発事故の危険区域を逃れて他県に一時移住した人たちの話である。福島県からは同じ境遇ということもあって、町内会や幾つかのグループが、現在でもバスを仕立てて希望者を募り、ボランティア活動が続けている。同郷という心安さは、お互いをどんなにか勇気付けたか想像するに難くない。ところが、何度が激励に参加した人の印象では、月日を経るに従って人々の様子は、寂しいとか悲しいという次元を超えて、態度のすべてに元気がなくなって来ていると云う。避難地は市町村がまとまって移住したり、また、同郷の人たちが必ずしも自分たちの土地ことばで話せる環境とは限らない。ボランティアが持参した調理を並べても、会話も少なく、そそくさと会場から出て行ってしまいうようになってしまったというのである。

この人たちが移転した折は危険が後押しし、放射線の届かない他県へと夢中で避難させた。各地区の人たちも親身になって世話をし

てくれた。さらに、福島県人はもちろん全国各地からもボランティアが激励に来てくれた。土地柄に変化はあったが、毎日が目新しくあつとゆう間に夏が来て、冬となり、そして、一年が過ぎた。この頃から人々の態度に変化が出てきたという。郷里はすでに警戒区域に線引きされていた。計画的避難区域は拡大し、当初は原発から三キロ以内の避難区域は十キロ以内に広げられ、そして、今は二十キロまで拡大された。セシウムの摂取量も当初の一キログラム当たり年間二百ミリシーベルトから二分の一の百ミリシーベルト以内に制限された。〔乳幼児用食品は五十ミリシーベルト・飲料水は一ミリシーベルト〕この数値にさえも変化が出るかも知れない。さらに、一つの町を線量によって区分し、帰還困難区域、避難指示区域、帰還解除準備区域②4・7・16避難指示解除準備区域・居住制限区域・帰還困難区域が正式に決定されたに分け、保証金に差をつける案が提示されている。住民が真に求めているものはお金ではない。住民は地図上に引かれた一本の線が住民の感情を引き裂くことを恐れているのである。この金銭万能思想はすでに解決不能に陥入りつつある。この点では東電、国、の住民感情の分析は極めて甘いと言わざるを得ない。会議の度に猫の目のように変わる避難区域の距離

と制限線量は、避難者ならずとも何を信じて良いのか分からなくしているからである。しかし、被害者にとっては喜怒哀楽の沁みこんだ唯一のふるさとであり、金銭は生活の基本的な道具でもある。心が揺れる人が現れても責めることはできない。

想像するに、避難者は幸いに津波からは逃れたものの、直ぐにでも帰宅できると思っていた。ところが、次々と新しい放射能拡散地域の報知が出された。人々は家も家財もそのままに、漁具や農具を海辺や田畑に残し、一時のつもりで避難したに違いないのだ。ところが自分の住んでいたところは危険区域となり、帰ることは勿論、立ち入ることが許されなくなってしまった。牛馬は勿論、ペットの犬や猫は無人の街で餌を捜してうろついた。防護服を着て二時間弱の一時帰宅を認められた人々が目にしたものは、囲いの中で飼われていた餓死したにわとりの哀れな群れだった。牛馬と犬は一部野生化し、無人の街は、不心得者の傍若無人の狩場となっていた。

この人たちは自分の生まれ育ったかつての故郷の懐かしい四季を、他郷の山河や草花を見て想像するしかなかったのだ。それにしても、帰宅が解除される日が来るのか来ないのかさえ分からないもどかしさは避難者を一層不安にさせた。あちこちには急拵えの仮設住宅は

建設されたものの、車のないお年寄りにとっては買ひもの店も診療所も遠くなっていた。避難者の口数が少なくなり、元気が無くなってきたのは、避難場所の待遇やボランティアの態度に対してではない。ましてや安定した生活をしている人への羨望や嫉みそねでもない。あえて推測するならば自分たちの将来が見えない不安なのである。憶測を拡大するならば、原発建設時の僅かな豊かさと安全神話に踊らされた愚かさが自身を責めているのかも知れない。

人の絆も脆もろさも実は紙一重である。会話や笑顔が少なくなると、人間は自他に対して無用な詮索をするようになる。世話をする側は「こんなにも・・・と思っているのに」に対して避難者側は違ったことを考える。「何も悪いことをしていないのに、どうして我々だけが・・・」言葉の少なくなった両者には、もはや相手を思いやった感謝したりする余裕がなくなる。これは戦時中、都会から疎開してきた人を好意で受け入れた地方の人との間に、多くの齟齬そごを生じさせた構図と似ている。哀れな人間の性さがである。幸いなことに今回は避難者から感謝の言葉は聞こえて来ても、諍いさかいのあったことは一件も聞こえて来なかったことに安堵する。

3・11以来大震災と原発事故に対していろいろな標語が流布し

ているが、「絆」の一字は最も多い。絆という文字の意味はもともと馬や犬や鷹を繋ぎとめて置く綱のことであるが、もう一つ、断つにしのびない恩愛、離れ難い情実という意もある。この後半の意味はバラバラに避難した人たちに大きな役目と意味を果たしたことは間違いないだろう。ボランティアの活動は、全国各地に散り散りに住んでいる人々に対して、相互に情況把握が出来るようなシステムを実施しているとどこも出て来ている。物事は負の面ばかりが強調されがちであるが、あたりまえのことを当たり前のよう出来るには根気と静かな情熱が要る。大震災や原発事故は誰かが故意に発生させたものではない。今、日本人は発想を百八十度回転させるべき機会を与えられているのかも知れない。千年に一度の巨大津波と人類が会おうはずのない原発事故は、我々に家族とは何か。人間の善意とは何か。生命とは何か。^{いのち}文化とは何か。利便とは何かを、今、深く考えさせているように思う。

今回の事故は、代償は大きかったが我々に人類文化の先頭を歩かせ、意味ある進化をさせようと試されている天の啓示かも知れない。このことは、原発の電源を再生可能エネルギーに大転換する絶好の機会かも知れないのだ。歩幅は小さくなるかも知れないが、日本人

は全叡智を結集してこれに耐える工夫をしなければならない。ほとんどが東京都に送られていた福島原発が事故翌年の夏には電力を二十五パーセント削減した実績がある。理由はどうあれ、これほどの被害をもたらした原発事故を思えば、心情的に安易に原発の再稼動に飛びつくことは出来ない。「絆」は動物も繋ぐが、改めて日本人の心と心を繋いだことの意味を噛み締めた。そして、それには我々が体験した愚かな歴史を後世の遺産として残す必要がある。この経験と体験は必ず次世代の原動力になるはずである。